事　務　職　員　部　会

Ⅰ．研究の概要

１．研究主題　　自主性と創造性にあふれる学校事務をめざして
～日常実践に根ざした事務職員の職務確立～

２．研究主題設定の理由

１．職務の確立のため自主性と創造性を重視した取組が求められている。
２、子どもの生活の場である、よりよい学校づくりが基本である。

３．研究の経過

任務論・本務論 ⇨ 財政財務活動 ⇨ 情報活動 ⇨

よりよい学校づくりにおいて、事務職員の果たせる役割の具体化をはかる。

４．研究推進の基本姿勢

「子ども」の生活の場としてのよりよい学校づくりに向け、事務職員に期待される願いや思いの把握と検証に努めながら、「学校間連携」を通して課題解決を図り、これまで積み上げてきた研究と実践を基盤とした管内の組織的研究を進める。

また近年学校事務と事務職員をめぐっては、学校教育法（つかさどる）や地教行法改正（共同事務室）、働き方改革関連施策による事務職員への「期待」など、大きな変化があった。この変化で学校事務を今後どのように推進していくのか自主性と創造性を発揮して研究を進める。

５．研究内容

今年度の研究についても、「事務職員は事務をつかさどる」ということを、学校運営に参画するという観点で捉えていきたいと考えた。

昨年度の研究において「つかさどる」は事務職員が主体的に企画・提案を行い、他者（他職種、他機関、地域等）との連携により取り組む必要があるのではないか、という大まかな共通理解にはある程度立てた。

しかし、この「つかさどる」がある程度共通理解されつつあるも、事務職員全体のものとなっているか、他職種や広い立場の人たちに共通認識されるようにするためにはどのような実践を行っていく必要があるのか、という新しい課題も浮き彫りとなった。

この新しい課題に向き合うためには、今一度私たち学校事務職員の仕事とは何なのか、そしてチーム学校という組織の中でどのような立場で役割を担っていくのかを見直し、我々が思い描く「つかさどる」事務職員像の共有をより深めていく必要がある。若年層においては先輩の実践から学び、蓄積されたデータを学習することで、各個人の「つかさどる」事務職員像の確立を模索する。中堅からベテラン層においても、他校の事務職員の実践に触れ、若年層の取組について交流を行うことで、時代の変化に合わせた「つかさどる」事務職員像の更新をしていく必要があるのではないか考える。

以上の観点とこれまでの研究成果と課題を踏まえて、今年度の研究においても法改正「事務をつかさどる」「財務財政活動による学校運営への参画」を念頭に、具体的な実践の積み上げと職務の捉え返しの取組を継続して行うこととした。

1 具体的な実践を通した学校運営への参画

（1）財政財務活動による学校運営への参画

1． 蓄積・発信の定着から連携へ

2． マネジメントサイクルの見つめ直し（問い返し）

3． 「保護者負担の公費化」の取組を確実にするための方策～拡大から継続～

（2）財政財務活動以外による学校運営への参画

1．教育情報活動の中で学校運営へ参加しているような実践

2．複数配置校ならではの取組のデータの蓄積

2 職務の捉え返し

1．運営計画への記載についての検証

2．標準職務表の導入にかかわる実態調査

様々なデータの蓄積を行い、検証・検討を行うことで現状抱えている問題のイメージを鮮明化することで、学校運営に参画する（教職員・教育委員会との連携する）ことをより強固にするのではないか。

また、事務職員間で共有している様々な課題や問題意識について、他職種に伝え・共感してもらうことで、事務職員固有の課題ではなく、学校（職場内）にある共通の課題として広く認知されていく。このような実践を積み重ねていくことで、第三者（教職員・教育委員会等）に浸透していくのではないかと考える。

以上のように日常実践を行っていくことで事務職員の可能性を模索し、職務の確立を目指し研究を行っていくこととする。

1．実践研究の経過

４月１２日　第１回推進委員研修会　リモート

４月１２日　石教研専門部会第一次研究協議会　リモート

５月２７日　第２回推進委員研修会、合同研修会…今年度の研究推進について

８月２５日　第４回推進委員研修会

１０月　４日　第５回推進委員研修会　…第二研究協議会市町村レポート丁合、管内事務職員研修会

１０月　６日　石教研専門部会二次研究協議会オンライン事前研修　リモート

１０月１４日　石教研専門部会第二次研究協議会

１１月２９日　石狩管内公立小中学校事務職員研修会

１２月　２日　第６回推進委員研修会…第二次研究協議会総括、管内事務職員研修会総括

３月　２日　第７回推進委員研修会…第二次研究協議会後の各市町村研究交流、次年度研究計画について

２．専門部会第二次研究協議会

分散会討議・・・財政財務活動を通したマネジメントから学校運営への参画へ

討議の柱１　各市町村が進める組織的実践の成果と課題について

◆蓄積された（データ）を活用・見せる・発信する取組について

【千　歳】【江　別】【恵　庭】【新篠津】
・教職員向け事務だより（江別：『絆』、千歳：『ノーサイド』）を発行している。学校だよりに収支決算を載せたりと、各市町村で積極的に発信する取組を行っている。
【恵　庭】
・諸費案内一覧表に集金しなくなった経費も０円として載せている。
【北広島】
・自校で教職員事務だよりを年２回発行している。
・広報誌「北広事務だより」を過去に作っていた。個人で事務だよりを発行している人もおり、今後は市全体で広報誌を使った取組を行うつもりである。
【江　別】
・年度末や年度初、全校で教材費決定前までに保護者負担軽減のため、学校で公費化する教材物品等を提示している。

◆「保護者負担の公費化」を推進する方策として、各校の取組において、実現可能なものと、学校間連携を通して実現可能なものについて

【恵　庭】
・年度途中で教員に過去のデータを提示しながらヒアリングを行った。教材費の減額を提案して、段階的に全ての減額を行っている。1年目でも複数年勤務の教員全てにヒアリングを行い、教材費の減額に事務職員が深く関わっている。
　ＰＴＡに関しては前もって資料を作り、役員会に参加して会費の減額を提案。不足分は学校で支出する等、本校での保護者負担の公費化を行っている。
【北広島】
・教材費の減額については、連携会議で集めた資料が役に立つ。データの提示は説得力がある。さらに私たちにはコミュニケーション能力が求められている。
・話さないと何も始まらない。教務担当教員と、公費化できるものについて話している。今年度はそのままでも、来年度以降に変えられるかを検討している。前任校では職員全員がわかるような形で掲示して、保護者負担軽減について教員側から話がきたりした。
【千　歳】
・２年前にスマートチャージを導入。初年度は抑えめで行ったが、結果として余剰が出てしまった。今年度は少し緩和したところ、設定上限をオーバーしてしまった。それ以降は輪転機を使用するようにして、最終的に

予算内に収まるようにしたい。消耗品費を圧迫することはなく、あくまで枚数のオーバーという状況。教員には極力負担をかけないように考慮している。

【石　狩】

・枚数だけにとらわれず、校内の印刷物をどういう風に減らしていくかという考え方を事務職員側から提案していかないとなかなか解決しない。本校では保護者向け文書はほとんど紙では出さず、メール配信等で対応している。年度末には、紙とメールどちらがいいかというアンケートをとる予定。

【江　別】

・江別では今春、コピー機更新のタイミングで高速カラープリンタが全校に導入された。既存コピー機に比べ、1枚あたりの単価が大幅に安価となった。印刷が速くなり、カラープリントは多くなっているが、会議資料のＰＤＦ化等ペーパーレス化も行っている。

・職員会議のペーパーレス化で印刷枚数を減らす、印刷物の選別、Ａ３印刷でＡ４にカットすることでカウンター数をおさえる等の工夫を行っている。

【石　狩】

・石狩市はすでに給食費は公会計化されている。市教育長との連携会議での話のなかで、教材費の公費化についても話したことがある。今まで教員が自らの判断で選定していた教材等を、公会計というフィルターを通すと、比較による価格の吟味などが入り、負担軽減につながるのではと考える。

討議の柱２　学校運営への参画と「つかさどる」について

◆学校運営へつながる「つかさどっている」業務について交流

【恵　庭】

・北海道ではすでにつかさどっていると考えている。恵庭のレポートにもあるが、他県が共同実施などで行っている事務職員の学校運営参画につながった総務省の事例についても、こちらでもすでに行っているものがとても多い。これからどうやって「つかさどる」かということも大切だが、やってきたものを共通理解して、学校運営計画に反映させたりしていくことも必要である。

【石　狩】

・子どもアンケート（タブレット使用）を実施したが、他団体との活動で特に障害はなかった。教育長からも推奨された。Ｈ小では３～６年生で先行してとりくんだが、職員会議等でも反対はなかった。

【江　別】

・子どもアンケートは昔から当別などで取り組まれているが、どう回答するかが大切。例えば「エアコンをつけてほしい」と言われたらどのように回答するのか？職員からは、できないことを聞かれたときに困ると反対されたが、事務職員として何ができるか考えたい。

【恵　庭】

・中学校では生徒総会の議案から要望が出てくるので、回答書を一緒に作っている。生徒の自治活動に関わって、壁新聞の記事で泡石鹸と固形石鹸について調べてデータを提供したこともある。

【恵　庭】

・職務の捉え返しについて、夏季研修会で話し合った。レポートにあるように今やっていることが、つかさどっているのではないかということで、恵庭市では落ちついた。新しいことはあるが、やっていることは今とそう変わりはない。

◆学校運営計画を検証することで、事務職員として業務の可能性や「つかさどる」の多様性の模索について

【江　別】

・校種や学校規模が異なるので、学校運営への参画と考えられる業務内容を全校同じに揃えることは難しいと思う。配置された学校で、事務職員として学校運営に参画することを意識しながら、どのように業務を行っていくのかを自主的に考えることや、教職員と連携していく方法を考え、行動していく力を付けていくことが必要である。

【石　狩】

・市内各校の運営計画を持ち寄って交流した、他の学校の運営計画をみて、こんなに違うということを知った。おおまかに載せているところもあれば、事細かく載せているところもあるなど、交流することによって、保護者負担軽減の交流同様に他校の実情を知って、自校の現状がはっきりした。

【恵　庭】

・北海道の事務職員は昔から職員会議に参加して、配分予算や備品購入等の提案をしてきた。今後は旅行行事検討など様々な分野にも参画できたら、つかさどるがさらに広がる。

・学校運営計画は、事務としてのマニュフェストを掲載するようにしている。

【千　歳】

・市内では、財政財務活動については、「つかさどる」と認識している方は多い。

【北広島】

・個人での意見となるが、「学級費で掃除機を買いたい」という話がでたことがある。保護者負担するものではなく、学級費での購入は違うとの話を伝えた。このように掃除機の購入可否や学級費を過剰に集めていること等に対しても、「つかさどる」事務職員として発言していくことが重要であると考える。

Ⅲ.　理論・実技研修会

○　石狩管内公立小中学校事務職員研修会

日時：令和４年１１月２９日（火）

会場：江別市（江別市民会館）　参加者：５２名

１．研修会の内容

講演会実施

講師として、社会福祉法人北海道社会福祉協議会地域共生社会推進本部ケアラー支援推進センター主査、西谷久美様に「ケアラーの現状と北海道ケアラー支援条例について～学校事務職員としてできること～」をテーマに講演をしていただいた。

ヤングケアラー問題が社会問題として大きく取り上げられ始めているが、ケアラーであることを自覚していない、ケアラーであることを表面化させたくない、特に思春期になるほどその傾向が強くなること、日常的に児童生徒や保護者と接する機会が多い学校事務職員として、どのようなアプローチができるか講演していただいた。

２．研修会の成果

ケアラーのことを「見よう」「理解しよう」という言葉は、自分の勤務校に「ケアラーはいない」という先入観を持っていないか改めて問い直すきっかけとなった。

帰宅して「きょうだい」の面倒を見るという日常的な家庭生活も「ケアラー」としてみていかなければならないという助言をいただいた。自分も周囲も「家族だから面倒見て当たり前」というある意味、不変なことがケアラー自身の逃げ道、周囲の支援の手を阻んでしまい、問題をより困難な方向に向かわせてしまう事例が紹介され、切り離して「支援」は支援として取り組んでいかなければならないと感じた。

ケアラーのおかれている現状が、近年ようやく明るみになったこと、行政の支援がようやく形になり始めているがこれからであること、ケアラー問題は一朝一夕では解決しない大きな社会問題であることを、この講演から改めて学ぶことができた。であるからこそ私たち学校事務職員は、現場の目線で継続的に児童生徒の変化にアンテナを張り、支援が必要な場合に必要な橋渡しができるよう、知識や経験を積む必要があると考えている。

Ⅳ　部会の成果と課題

１．成果

【石狩】

予算要望書の作成に関わって、事務職員が連携しながら６つの重点項目を設定し活動し予算要望活動の強化をはかった。夏季研修会においては講師を招き「事務をつかさどる」ついての研修を行い、豊富な実践や「つかさどる」についての考え方の共有を行った。いしかり子どもアンケートの取組においては子どもの願いを予算要望に繋げ活用していくという「事務をつかさどる」実践を行った。

【当別・新篠津】

財政基盤の違う市町村の枠組みを超え、学校間の連携的視点に基づいた財政財務活動に取り組みで着実な公費化が行われた。公費化活動の振り返りをしっかりと行い、更なる取組に繋げることができた。連携組織を通して振り返り作業を行う事で課題を共通化する事が出来た。

【北広島】

宿泊学習や修学旅行などの「旅行的行事」調査では、旅行場所や活動内容など、事務職員が関われる部分は限られるが、小中１貫教育とからめ、調査で集約された資料を提示することによって、他職種に保護者負担の軽減について周知する取り組みがなされた。新型コロナウイルス感染症対策費への取り組みでは、校長会や、教頭会にも広がりをみせ、予算要望につながる取り組みがなされた

【千歳】

保護者負担軽減の取組では、教育費の保護者負担に対する千歳市の考え方を 4 つの目的意識を持ち、共通理解を図った上で調査を行われた。保護者負担の現状の確認のみでなく，推奨リストの調査・共有する事で取り組みを停滞させること無く進められた。事務職員の取組が人事異動等で無くなってしまわないようにという観点で、学校運営計画・職員会議等で提示を行う可視化の取組が継続して行われた。

【江別】

学校徴収金（学年教材費等）の公費化の取り組みでは、「ファイル代」と「用紙代」が保護者からの徴収対象になっているかどうかを継続的確認しながら教材費の金額について調査を行った。また新たに、卒業アルバム代調査を行った。保護者の大きな負担になっていることに対して、市内全体で現状の確認を行い、問題意識を他職種に共有できるように活動した。さらに今後は、就学援助費として支給されるように取り組んでいく。

【恵庭】

コロナ禍における財政的状況と職務にかかわっての２点が調査された。財政的な交流では、新型コロナウイルス感染症対策費をどのように周知・執行されているかを市内的に交流し、子どもや現場に還元しているかを確認した。職務にかかわってのアンケートではこれまでの業務や運営計画を交流し、つかさどっている業務についての検討がなされた。合わせて夏季研修会では、道外事務職員の業務についての研修がされ、業務内容の違い等を学ぶ機会となった。

今年度の研究・実践においても、「事務をつかさどる」ということを学校運営に参画するという観点で捉えていくために、「具体的な実践を通した学校運営への参画」と「職務の捉え返し」の２つを柱とした。

「具体的な実践を通した学校運営への参画」として、各市町村では調査活動が継続された。各種調査活動結果は、「公費化リスト」や「振り返りシート」、「教職員向け事務だより」等によって可視化され、他職種に我々が持つ問題意識を共有する取組がなされた。これらの蓄積された資料をもとに各校が保護者負担公費化に向けて取組を進めている状況が数多く報告された。

また、これらの調査結果を活用し、学校徴収金の就学援助への移行の取組や感染症対策費を有効に活用できるように要望するといった、取組に広がりをみせている。積み上げてきたデータとともに時代の変化を捉え、様々な視点において取組が継続されたことが成果である。

「職務の捉え返し」では昨年度の取組や調査結果を受けての交流や実践発表・各種研修会等により、「つかさどる」は事務職員が主体的に企画・提案を行い、他者（他職種、他機関、地域等）との連携により取り組む必要がある、という大まかな共通理解を得ている。今年度の取組においては、「事務をつかさどる」をテーマとした講演や学校運営計画の検証等を通して業務について交流を行ったものや、道外の事務職員の業務や実態を学習したうえで北海道の事務職員の実態と比較することでつかさどる業務についての研修をした取組が報告されている。学校間連携を通して、学校規模や事務職員の経験年数に関わらず「つかさどる」業務について議論を行い、「つかさどる」事務職員像のイメージを深めるかことができたことが成果として挙げられる。

２．課題

１つ目の柱である、「具体的な実践を通した学校運営への参画」では、新しい就学援助項目の要望や新型コロナウイルス感染症対策予算の要望等において、他職種・他機関との連携を深め、現状の改善に向けた取組が数多く報告されている。事務職員が抱えている問題意識等を多職種に広めて共有するという観点から「事務をつかさどる」実践が積み上げられているのではないかと考える。しかし、これらは市町村単位の取組であり、各学校・事務職員の取組についての交流を活発にすることができなかった。このことを踏まえた上で、調査活動を今後も継続して各校の取組を共有化し、交流する場を設けることが必要である。学校間連携を通して、学校規模や事務職員の経験年数の違い等に着目しつつ、「事務をつかさどる」実践の新しい切り口や考え方を模索していくことが重要になってくる。今後は様々な事例や実態に触れる機会を増やし、各個人の「つかさどる」事務職員像の確立や更新を目指していきたい。

２つ目の柱である、「職務の捉え返し」では、昨年度と今年度の学校間連携での研修や交流を通して「事務をつかさどる」ということの共通理解を深めることができたのは前述のとおりである。しかし、この共通理解は事務職員間だけにとどまっている現状がある。「つかさどる」の意義から、事務職員のみで完結するものではなく、他者との連携・協力・協働がなければ成し得ない。これから事務職員に求められることは、「つかさどる」実践の積み重ねであると考える。財政財務活動をはじめ、これまで行ってきた取組の中にも「つかさどる」要素が数多くあることが、先の研究の中で確認されてきた。これらの取組を念頭に計画し実践して実績をつくっていくことで、私たちは今後自信も持って「つかさどる」を明示できるようになると考える。このような「つかさどる」実践を積み上げていき、学校内外の他職種に「つかさどる」を認知・定着を進めていくことが重要であろう。こうした取組を通して、私たちは教育という大きな柱のもとで「学校事務をつかさどる」を確立させていく必要があると考える。（文責　丸毛　大介・杉浦　麻子・細川　貴史）